

聖書：Ⅱサムエル 16：1～23

説教題：呪いに代えて良いことを

日時：2018年11月11日（夕拝）

ダビデは今、自分の息子アブサロムに追われて、まさかの都落ちを余儀なくされています。用意周到に準備した息子の反乱によって、ダビデは一夜にして王位転落。前の章では泣きながら裸足でオリーブ山の坂を登らなければならない状況に追い込まれました。なぜこんなことになったのか。元をたどれば、それはダビデの罪が招いたことでした。そんなダビデに3人の助け手が前の章で与えられました。詳しく振り返ることはしませんが、その3人とはガテ人イタイ、祭司ツアドク、アルキ人フシャイ。これは悔い改めたダビデに対する神のあわれみの導きと言えます。それに続く今日の16章には、反対にダビデに敵する者たちが3人出て来ます。3人の味方が現れたかと思うと、今度は3人の敵対者が現れて来た。そういう状況でダビデはどのように歩んだでしょうか。登場する3人に注目しながら、3つに分けてこの章を見て行きたいと思います。

まず一人目は1～4節のツィバです。彼はメフィボシェテのしもべです。メフィボシェテとは、ダビデの前の王サウルの家の生き残りで、足の萎えた人でした。通常、新しく王になった人は、前の王家が謀反を起こすことがないように、皆殺しにするものです。ダビデはサウルに長らく迫害され、いのちを追われた人でしたから、十分にそうして良い立場にありました。しかしダビデは主なる神が自分に良くしてくださったように、自分もサウル家の残りの者に恵みを施したいと言って、メフィボシェテを寛大に扱いました。そしてその財産管理をサウルの家のツィバというしもべに委ねたのです(9章)。そのツィバが沢山の食料を持ってダビデの前に現れたのです。これがダビデを喜ばせなかったはずはありません。ダビデは3節で問います。「あなたの主人の息子はどこにいるのか。」するとツィバはこう答えました。「今、エルサレムにとどまっております。あの方は、『今日、イスラエルの家は、父の王国を私に返してくれる』と言っておりました。」ダビデはこれを聞いて怒ります。なぜなら今の言葉によれば、メフィボシェテはダビデの都落ちを喜んでいることになるからです。ダビデがいなくなって、これでサウル王朝が復興する！と彼ははしゃいでいる。そこでダビデはツィバに言います。「見よ、メフィボシェテのものはみな、あなたのものだ。」ツィバは答えます。「王様。あなた様のご好意をいただくことができますように、伏してお願いいたします。」

さてこの記事を私たちはどう読むべきでしょうか。後の19章24～30節を見ると、このツイバの言葉は正しくなかったことが分かります。メフィボシェテは決してダビデの都落ちを喜んでいただけではなかった。彼はそんな野心は持っていなかった。つまりこれはツイバの策略だったのです。彼はこの混乱に乗じてダビデに取り入り、メフィボシェテについて偽りの情報を流して、自分だけが利益を得ようとしたのです。足の悪いメフィボシェテはここまで来ることはできないだろうし、逃亡中のダビデもこのことを確かめる時間も、心の余裕も方法もないだろうと踏んで。私たちは改めてここから、一方からの情報だけで判断することの危険を教えられます。困った時に助けの手を差し伸べてくれたからと言って、その人の言うことを全部信じてしまっただけではダメなのです。優しくしてくれたと言って、その人が語る誰かについての話を鵜呑みにしてはならないのです。ダビデはこれによって何ら悪い心を持っていなかったメフィボシェテを一方向的に疑い、悪く見て行動するという汚点を残してしまったのです。

二人目の敵対者は5～14節に出て来るシムイという人物です。彼もサウルの家の一族の一人と記されています。彼は盛んに呪いの言葉を吐きながら出て来てダビデとダビデの家来たちに向かって石を投げつけて来ます。彼の言った言葉が7～8節にあります。その呪いのことばのポイントは、8節にあるように「主がサウルの家すべての血に報いたのだ」ということです。サウルの家から見れば、ダビデは自分たちの部族出身の王を滅ぼした憎い王です。すでにたくさんの勇者が死にました。そこでシムイは言うわけです。「おまえが今、このような目にあっているのは主のさばきなのだ！主はお前から王位をはぎ取ってアブサロムに与えた。おまえは災いに会うのだ。おまえは血まみれの男なのだから。」と。そして13節から分かりますように、山の中腹をダビデと並行して歩きながら呪ったり、石を投げたり、土のちりをかけたりしました。

これを見てダビデの側近アビシャイが、「行って、あの首をはねさせてください」と申し出ます。しかし驚くべきはダビデの態度です。彼は11節で言います。「放っておきなさい。彼に呪わせなさい。主が彼に命じられたのだから」と。これはどういうことでしょうか。シムイの言葉は正しくありません。ダビデは決してサウルに手をかけませんでした。迫害されても迫害されても王を敬い、手出ししませんでした。そういう意味でシムイの言葉は事実誤認だ！名誉毀損だ！と訴えることもできました。しかしダビデはシムイがこうして自分を呪い、悩ませていることの背後に主の御手があることを見ていたのです。それは彼が自分の罪を深く受け止めていたからに他なりません。確かにそこ

には不当な批判や中傷が含まれていましたが、だからと言ってそれを取り上げて、不当だ！不当だ！と叫ぶことはできない。なぜなら自分はこのように呪われても当然のことをしたからです。姦淫と殺人という大変な罪を犯したからです。だからたとえどのように呪われ、辱しめられたとしても文句を言うことはできない。むしろ主は彼を用いて私を懲らしめておられるのだとダビデは受け取ったのです。だからこの辱めは主から来たものとして甘んじて耐え忍ばなければならない。これは自分にふさわしい報いなのだ。

しかしその一方で注目すべきは、彼はこの状況でもなお主にあって望みを抱いていたことです。12 節：「おそらく、主は私の心をご覧になるだろう。そして主は今日の彼の呪いに代えて、私に良いことをもって報いてくださるだろう。」なぜダビデはこのような言うことができたのでしょうか。その根拠はここに書かれていませんが、これは神に対するダビデの信仰から出て来たものでしょう。参考になる箇所として二つの御言葉を考えることができます。一つは詩篇 51 篇 17 節です。「神へのいけにえは砕かれた霊。打たれ砕かれた心。神よあなたはそれを蔑まれません。」この詩篇はダビデがバテ・シェバと姦淫の罪を犯した後、預言者ナタンに罪を指摘され、悔い改めた時の詩篇です。彼はそこで自分の罪を正直に認め、告白した時に主の赦しを受けました。主がその悔いた心を主がさげすまず、豊かにあわれんでくださったことを体験しました。そういう主は、自分をいつまでも苦しみの中に捨て置かれることはない。必要な懲らしめの期間を経た後、必ず良いことを導いてくださる。そのように主に信頼したのでしょう。もう一つ彼を支えたのはⅡサムエル記 7 章で見た、いわゆるダビデ契約の言葉であったと考えられます。主は 7 章 12～13 節でこう言われました。「わたしは、あなたの身から出る世継ぎの子をあなたの後に起こし、彼の王国を確立させる。彼はわたしの名のために一つの家を建て、わたしは彼の王国の王座をとこしえまでも堅く立てる。」これはこれからダビデ王朝が続き、ダビデの子孫からやがてまことの王メシヤが出るという約束でした。あなたの王朝は続くと言われたのだから、自分がここで終わりになるはずはない。ダビデは 7 章で主に「あなたはこのしもべに、この良いことを約束してくださいました」と祈りましたが、その「良いこと」という言葉と今日の章 12 節の「良いこと」という言葉は同じ言葉です。つまりダビデがここで考えていた「良いこと」とは、特にダビデ契約における主の約束であっただろうということです。主は悔い改めた自分に、必ずあの約束を果たしてくださると信じていた。それゆえ、今しばらく懲らしめを受けなければならないとしても、主は今日の呪いに代えて必ず私に良いことを持って報いてくださると信じ続けたのです。

これは私たちにも当てはめられることだと思います。神はこのダビデ契約に従って約束のメシヤ、救い主イエス様をすでに地上に送って下さいました。その方の十字架の死と復活によって私たちの罪を赦し、私たちを救うためのすべてのことをして下さいました。であるなら、罪を告白し、その罪の赦しをいただいた私たちが、いつまでも苦しみの中にあり続けるなどあり得るでしょうか。神が約束くださった最終的な救いにあずからないことなどあり得るでしょうか。あり得ないことです！主はご自身が良いと思われる期間、私たちを懲らしめの中に置かれますが、その期間が終われば、その後の良いものを用意して下さる。主は今日の呪いに代えて、必ず私に良いことを持って報いてくださる。私たちは様々な苦境の中で心騒がせず、ダビデのように神に信仰の目を上げ、希望を告白して歩いて行くべきではないでしょうか。

最後 3 人目は 15～23 節のアヒトフェルです。彼はダビデを裏切ってアブサロムの側についてダビデの優秀な側近です。最後の 23 節にある通り、彼の助言は人が神の言葉を伺って得ることばのようで、彼にまさる知恵の持ち主はいないと思われるほどの人でした。その彼がアブサロムに完璧なアドバイスをします。それは 21 節にある通り、ダビデが残したそばめたちのところにおはいいくくださいというものです。このような箇所は当時の文脈という中で読む必要があります。当時の王たちは、このようないわばハーレムを持っており、それを乗っ取ることは自分が新しい王になったことをはっきり示す行為でした。ダビデは死んだ！と宣言するような行為でした。これはダビデの感情を逆なでするものだったでしょう。人々はこれによってダビデとアブシャロムの親子関係は修復不可能となったことを知り、あいまいな態度を取っていた者たちも決心してアブサロムの側に付くだろうとアヒトフェルは計算した。さすがアヒトフェルです。アブサロムの益となることを強力に押し進めて行きます。

しかし私たちがここを読んで思うのはアヒトフェルの賢さだけでしょうか。他に何か思い起こさないでしょうか。それは 12 章 11～12 節で見た主のお言葉です。主はダビデに対して、「あなたの妻たちをあなたの目の前で奪い取り、あなたの隣人に与える。彼は、白昼公然と、あなたの妻たちと寝るようになる。あなたは隠れてそれをしたが、わたしはイスラエル全体の前で、白日のもとで、このことを行う。」と言っておられました。その通りのことがここに起こっただけです。つまりここに見るのは何でしょう。それはアヒトフェルはダビデを滅ぼそうとして、その知恵を最大限に発揮しましたが、そ

これは神にとっては想定外の出来事では全くなかったということです。むしろアヒトフェルは神がすでに定めていた計画を成就するしもべでしかなかった。アヒトフェルはまさかそういう役割を果たしているとは自分では考えてもみませんでした。現実には神がご計画したことを成し遂げ、それを前進させる道具になってしまっている！ここに私たちは大きな慰めを持ちます。どんな人間の知恵や力も主の知恵や力を上回ることはできない。どんな敵の行動も主の力強い御手の下で収められて、かえって神のご計画前進のために用いられてしまう。その究極の例はイエス様の十字架です。イエス様を憎み、ねたんだ人たちは、自分たちの悪い思いでイエス様を十字架に付けました。これで邪魔な存在を葬り去ったと喜んでいました。ところが彼らはそうして知らずして、罪人の代わりにイエス様を十字架に付け、それによって信じる者たちを救うという神のご計画が成就されるための道具として用いられてしまいました。神はこのようにご自身に逆らう者たちの悪や反抗さえも用いてご自身のみこころを成し遂げられます。ここでもアヒトフェルはダビデを決定的な敗北に追いやろうとしましたが、それは結局のところ、ダビデをある期間懲らしめるための神の道具として用いられただけだったのです。

私たちの生活も、この章のダビデのように混乱と厳しい状況にあるかもしれません。そして自分は罪の報いを刈り取っているのだらうと思うことがあるかもしれません。しかしそんな私たちにとっての慰めはあわれみ深い神がすべての主権者であるということです。色々な人が私を攻撃し、私を罠に陥れようと活動しているかもしれませんが、真の意味ですべてを握っておられるのは主なる神です。そして主がご自身のみこころを行われます。ですから私たちは周りの状況や人の動きに目を奪われるのではなく、この真の主権を持ちたもう神にこそ目を上げ、信頼して行けば良いのだと教えられるのではないのでしょうか。その神は私たちが罪を告白するなら赦してくださる方であり、悔いた心をさげすみなさらない方です。適切な期間、懲らしめを与えた後、その学びのプロセスを終了した者に必ず良いことを報いてくださる。私たちはその主を見上げて御前にへりくだり、ダビデのように希望を告白して歩みたいのです。今日、まだしばらく耐え忍ばなければならぬとしても、主はこの呪いに代えて私に良いことを報いてくださる。私はその主に信頼して、歩みを進めて行こう！と。